

オフィス 大変革時代

Introduction



■大和ハウス東京ビル

地球環境との

共生を 目指して

昨今、企業活動の大きなテーマとして
“エコロジー”という問題が盛んに取り沙汰されているが、
いち早く環境との共生を図り、
その保全活動を組織的に推進している企業がある。
21世紀は資源循環型社会であるという認識をベースに、
環境問題への取り組みを企業の社会的使命と捉え、
その企業理念を具現化したビジネスステージ
——「大和ハウス東京ビル」のオフィスは、
社会にメッセージを発信し続ける。

■12階 技術系執務フロア

ゴミ箱を置かず、各人の机の横にリサイクルポケットを設置。OA作業と図面チェック作業に適した、L字型のレイアウトを採用している。

環境・省エネ・
健康・安全・品質



■5階 リビングサロン

接客にも利用される住宅総合ショールーム。

■2階 大ホール

天井高7mの空間には、約1,000名を収容可能。13m×6mの大型スクリーンを備えている。

建築構造「100年ビル」

“建築の工業化”のパイオニア、大和ハウス工業は、昭和30年の創業以来、住宅事業を核に、オフィスビルや商業・物流施設などの建築から、都市再開発事業と都市空間を包括する環境ステージづくりまで、総合生活産業の担い手として多角的な事業展開を図っている。昨年、同社は東西のツインビルである大阪本社ビルと東京ビルを建設し、全国の事業所への情報発信基地とした。その一つ『大和ハウス東京ビル』

(地上23階建・延床面積14,291坪)は、今、話題の飯田橋JR貨物駅用地土地区画整理事業のリーディングプロジェクトでもある。同ビルのテーマは、建築構造「100年ビル」。「環境・省エネ・健康・安全・品質」を基本コンセプトに、半世紀にわたり同社が蓄積した多様なノウハウを結集。時間の経過とともに劣化するのではなく、逆に、時代の変化に対応し、無限に成長していくビルを実現した。



■2階 レストラン

195席のビュッフェ式レストランで、社員食堂として利用できる。

快適かつ健康的なオフィス

ビルの建設・運営に関しては、39の建設推進部会を組織。ワーカー主体のオフィスづくりを推進するため、情報を開示するとともに、アンケート調査を実施し、意見や要望をハード・ソフト両面のスペックに反映させた。オフィス空間は、天井高2,700mm。什器備品高を制限し、開放感とコミュニケーションを同時に実現している。また、ワー

カーの健康に配慮し、内装材はホルムアルデヒドなどの有害物質を放散する建材を排除。外装も、カーテンウォールの一部に外気の導入口を設け、高層ビルでありながら自然換気による新鮮な空気を取り入れるシステムを導入した。住宅事業を総合的に展開する同社ならではの技術やノウハウが、ビルのいたるところに生かされている。



■各階 リサイクルステーション

各執務フロアに2カ所ずつ設置。紙類、ダンボール、容器、金属類など完全分別を行っている。

環境保全を考慮したオフィス

省エネ・省資源・リサイクルによる環境負荷低減への取り組みは、同ビルの基本コンセプトの一つであり、大きな特長でもある。電力負荷・熱負荷を削減するため、総合エネルギー効率の高いガスコージェネレーションシステムと、氷蓄熱空調システムを導入。水資源に関しては、雑排水を再利用する中水システムを採用し、ビル全体で使用する水の約4分の1を賄っている。また、3R「Reduce（削減）・Reuse（再使用）・Recycle（再利用）」をキーワードに、ゴミを22種類に分別収集

し、再資源化を徹底。フロア内にはゴミ箱を一切設置せず、個人レベルで分別した後、各階2カ所に設置したリサイクルステーションを経由して、地下のリサイクルセンターに収集され、処理される。オフィスで発生する紙ゴミは、トイレトーパーや再生紙に加工され、再びこのビルで使用される。同ビルの廃棄物のリサイクル率は、82.7%（今年3月調査）。この数字は、環境保全を社会的責務とする企業風土に根づいた、ワーカー一人ひとりの自覚に支えられている。



■地下1階 リサイクルセンター

全館のリサイクルステーションから集まったものを処理。生ゴミ処理機も設置している。

